日本武道学会剣道専門分科会報２０１６

ESPRIT

剣道専門分科会 会長挨拶

大保木 輝雄

平成27年度 日本武道学会剣道専門分科会研究会

「民間活字メディアからみた剣道」

月刊剣道時代編集長
小林 伸郎

月刊剣道日本編集長
安藤雄一郎

関西大学・Kendo World主筆 司会
アレキサンダー・ベネット

海外研修報告

「ニュージーランドのスポーツの捉え方と剣道」

専修大学
齋藤 実

事業報告

会計報告

事務局便り

Division of KENDO, Japanese Academy of BUDO
日本武道学会剣道専門分科会

目 次

挨拶 ・・ 1
剣道専門分科会　会長　大保木 輝雄（埼玉大学名誉教授）

平成２７年度日本武道学会剣道専門分科会研究会 ・・ 3
「民間活字メディアからみた剣道」
講師：小林伸郎氏（月刊剣道時代編集長）安藤雄一郎氏（月刊剣道日本編集長）
司会：アレキサンダー・ベネット（関西大学・Kendo World主筆）

海外研修報告 ・・ 17
「ニュージーランドのスポーツの捉え方と剣道」
専修大学　齋藤 実

平成２７年度剣道専門分科会　事業報告 ・・ 25
平成２７年度剣道専門分科会　一般会計決算書
特別会計決算
16WKC 関係企画会計決算

平成２８年度剣道専門分科会　事業計画 ・・ 28
平成２８年度剣道専門分科会　一般会計予算書

事務局便り ・・ 30

挨　拶

剣道専門分科会　会長 大保木 輝雄

杉江先生を偲んで

本年7月6日、本会二代目会長を務められた杉江正敏先生が69歳で急逝されました。痛恨の極みです。

先生の本会に託された思いを振り返りながら、我々のなすべきことを再度確認することで追悼の意を表したいと思います。

杉江先生が本会会長を務められたのは平成18年（2006）から同20年（2008）までの3年間でした。この間、全日本剣道連盟は、文科省の「中学校における武道必修化」が進行するなか、平成19年（2007）に「剣道指導の心構え」を制定。グローバル化する社会のなかで、日本という国の伝統性を次世代に如何に伝えるかという国家プロジェクトを射程距離におき、剣道の特性を踏まえつつ、昭和50年（1975）に制定された「剣道理念」に沿った具体的な指標を示しました。

会長に就任した当時、先生は日本武道学会剣道専門分科会会報『ESPRIT』の挨拶文で、「武道学、特に剣道の科学は、方法は多様であろうかと存じますが、実践にねざしたものでありたいと願っております。これは近世中期以降の知行合一や事理一致の思想を背景として成立してきた剣道の宿命であり、保持すべき伝統性でもあろうかと考えます」と述べ、青少年の現状と本会の存在意義について、「近時の青少年層に共通してみられる『心配事』は、知的学習と並行的・同時的に、行為・行動・運動を通じて獲得すべき、臨床知（体験知）が充分に備わっていないことではないでしょうか。剣道が、この『心配事』の幾分かの軽減に役に立つのでは、と考えているのは、私一人ではないでしょう」（『ESPRIT』2006）と表明されています。

＜平成１９年１１月、日本武道学会剣道専門分科会研究会にて撮影＞

会長就任２年目には、「剣道指導の心構え」の制定を受け、近年の試合で散見されようになった刃筋の正しくない打ち方や鎬を意識するための「摺り上げ』などの技法について、「自然科学方面（力学・生理学など）からのアプローチがなされ、正しい打ちと、いわゆる『平打ち』との刃筋の方向と手の返り方の違い、払い技と摺り上げ技の異同などについて分科会が中心となって、指導・自然・人文の三方面から検証されることを期待します」と指摘。さらに、幼少年に対する普及奨励と指導法に関して、「幼少年（含父兄）の要望や関心は時代とともに変化します。これらのニーズを社会科学的に調査研究しながら、過去の実践例を歴史的に分析し、各地・各校・各人の指導例を検証しながら、剣道の伝統的文化性が損なわれない方向で、分科会がチームを組み何らかの提言がなされることが急務

と考えます」（『ESPRIT』2007）と提言されています。

そして、会長任期最後の年に開催された剣道専門分科会企画フォーラム「形剣術と竹刀剣道－斬突から打突その身体技法の系譜－」の司会を務められ、「われわれの学会の命題は、基礎的研究の蓄積とともに、実践的研究や指導法の開発にあることを再認識した次第です」と感想を述べられました。さらに、中学校における武道必修化について「この問題に関する識者の意見を散見するところ、歓迎しつつも教材の配当次第では武道離れの生徒を生み出すのではとの懸念が表明されています。もうすでに指導案の策定がすすめられているように聞き及んでおりますが、先の懸念が払拭されるような原案が示されることを期待しております」と憂慮。挨拶の最後を、「フォーラムで作道氏が講演抄録で引用された森政弘氏の『継承なき創造は稚拙の域を出ない』そして『創造なき継承は形骸化の域を出ない』の言葉を噛みしめながら、分科会会員各位の研究の成果が結集され、剣道で逃してはならない『継承』すべきものは何か、を検証しながら、大胆な『創造』がなされることを祈念して御挨拶といたします」（『ESPRIT』2008）と締め括っておられます。

杉江先生の剣道人生は「私が剣道を始めた昭和28年頃、小学校の物置の一番奥に隠してあった20組位の少年用の防具（竹胴）を引っ張り出し、戦前、近在の小学校の巡回指導を担当された五段の先生（50歳代）に指導を受けました」（『ESPRIT』2007）と自ら書かれているように、小学校一年生から始まりました。昭和２８年（1953）は、戦後、新生・全日本剣道連盟が結成された翌年ですから、戦後剣道の復活時から剣道を始められた先生は、まさに戦後剣道の第一期生ともいうべき存在です。その後、大学院で体育史を専攻され、近代スポーツ群に位置付けられた武道の本質究明のために新たな史料の発掘、分析、発表に全精力を傾けられました。特筆すべきは、1889年から1916年に刊行された518冊にも及ぶ『風俗画報』、1923年から刊行された膨大な量の『アサヒスポーツ』に掲載された武道に関する記事を丹念に調べ上げた大仕事です。その成果は、数年に亘り学会で発表され膨大な資料として配布されましたが、一部は月刊武道に「旧きをたずねて新しきを知る－写真と記事でたどる武道の近代史」と題し27回（平成11年1月号～13年3月号）の連載物として世に出されました。その後、先生は、全日本剣道連盟設立50周年の記念事業として出版された『剣道の歴史』の編集部会長としてその力を遺憾なく発揮されたのです。

戦後剣道の流れを身をもって体験された杉江先生の生き様は、剣道の稽古・教育・研究の三足の草鞋を履き、自らの背中を見せながらそれぞれの立場で多くの後進を育て、戦後剣道の歴史と歩みを体現されたものでした。

私ども後進が引き継ぐべきは、「挨拶文」に残された文言を、それこそ身を以て再確認し、本会の社会的責任を果たす為にも「剣道で逃してはならない『継承』すべきものは何か、を検証しながら、大胆な『創造』」に向かって着実な歩みを進めることです。我々一人ひとりの決意が、ご恩に報いることになると思います。

杉江先生、安らかにお眠りください。

合掌

平成27年度日本武道学会剣道専門分科会研究会

民間活字メディアからみた剣道

日　時：平成28年３月12日（土）15:00～17:00

会　場：講道館　２階　第４会議室

講　師：小林伸郎氏（月刊剣道時代編集長）安藤雄一郎氏（月刊剣道日本編集長）

司　会：アレキサンダー・ベネット（関西大学・Kendo World主筆）

長尾　進（剣道専門分科会幹事長）：皆さまこんにちは。日本武道学会剣道専門分科会幹事長を務めております長尾です。どうぞよろしくお願いいたします。今日の研究会は、「メディアと剣道」シリーズの第２弾として「民間活字メディアからみた剣道」ということで、月刊剣道時代の小林編集長、月刊剣道日本の安藤編集長に来ていただきました。それからご存知でしょうが、Kendo　Worldという英語雑誌の主筆であるアレキサンダー・ベネット先生に司会をお務めいただきます。この３人の方に存分にお話しいただき、我われの研究上の糧にさせていただければと思います。どうぞ、こういった場ですので、気楽にお話しいただければと思います。

大保木輝雄（剣道専門分科会会長）：剣道専門分科会会長の大保木です。今日はお忙しいところありがとうございます。私どもは創刊に近い号から両誌とも読んでおり、たくさんの記事を研究上の資料として参考にさせていただいております。今日はその雑誌を作ってくださる方のねらいをお聞きできれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

アレキサンダー・ベネット：よろしくお願いします。はじめに小林さん・安藤さんのお２人に15分から20分ずつお話をしていただいて、その後フロアから質問していただくという形で進行いたします。

今、大保木先生がおっしゃったように剣道時代・剣道日本は昔からある雑誌であり、あって当たり前のようですけれども、実は何をしているのか、そして大変なご苦労をされていることを誰も知らないのではないかと思います。私も剣道雑誌の作成に関わっておりますので、どれだけ大変なことか少しわかりますが、剣道日本さん、剣道時代さんはさらに大変だと思います。また、非常に貴重な記録があり、剣道時代・剣道日本の記事を資料として使うことも多いです。それらの記述は、剣道の文化を保存するにあたって非常に重要なものです。同時に剣道の普及にも重要なものであるわけです。しかし、出版業も苦しい時代になり、剣道家・武道家が紙媒体の文章を読んでくれなくなってきました。買ってくれないことには雑誌が続きませんから、どういう内容を載せるか、色々なことを考えなければなりません。そして、「剣道はこうあるべきだろう」と思いながらも、会社としては売り上げを伸ばさないといけないというような矛盾するところもあるかと思います。

私がKendo　Worldを立ち上げた時はちょうどインターネットが普及し始めたばかりの頃で、当時は剣道に関する情報を得るために本を買うしかなかったわけです。今はインターネットを見れば英語でも日本語でもたくさんの情報が載っています。そういう中で雑誌としては最新技術とどうやって付き合い、どう取り入れていくのか、という問題もあると思います。

ただ単に取材に行って雑誌を出しているだけではなくて、色々と考えながら、必死に剣道文化のためにやっていただいていると思います。そのような点について、剣道をやっている方がもっと考えてくださるようになる良い機会になればと思います。それでは、まず小林さんからお話をいただきたいと思います。

小林伸郎（月刊剣道時代編集長）：皆さまこんにちは。月刊剣道時代の小林伸郎です。本日はこのような席にお招きいただきまし

て本当にありがとうございます。この話をいただいたとき、正直に申しまして本当に困りました。このような大きなテーマで考えることもなく、毎月雑誌を作る事だけを考えていたものですから、どうしようかと今緊張しています。しかし、雑誌創刊の頃から作ってきたことを話してくださいということでしたので、まずはそこからお話ししたいと思います。

剣道時代が創刊したのは昭和49年１月号からです。私はまだ２歳でした。当然入社しておりませんので、先輩から聞いたことをまずお話しします。もう亡くなりましたが、初代の編集長は小澤誠と申します。全日本剣道連盟から剣道の雑誌を作ってはどうかと相談を受けたため、全剣連の事務局にいらっしゃった榎本正義先生に大変お世話になりながら雑誌を立ち上げたと聞いております。当時はＢ５判のサイズで、文字ばかりでした。各先生方のご協力のもと、投稿という形で記事を作ることが中心だったそうです。２年後に剣道日本さんが創刊しまして、そこから両誌作っていくような形になりました。

私が剣道時代に携わるようになったのはそれから何年も後の平成７年からです。平成７年から剣道時代を作らせていただいて、ちょうど20年になりました。私が責任者になったのが５年前、2010年です。現在、自分が作る上で心がけていることとしては、まず、雑誌柄、剣道をする人しか読みませんので、剣道をする人の何か役に立ちたいという気持ちで作っています。私も剣道をやっていますが、現在、大人の方は多くても週１～２回しか稽古できないというのが現状だと思います。少しでもその方たちの役に立つような雑誌にしたいという気持ちで作っております。この点を考えると、どうやったら打てるかということや、どうやったら昇段できるか、どうしたら強くなれるか、そのような記事が中心になってきます。それを毎月、手を変え、品を変え、作っているわけですけれども、剣道の打突部位は４つしかないので、面・小手・胴・突、をやっても４回しか持ちません。その中で縦から、後ろから、斜めから、色々とテーマを変えながらやっているわけです。最近は出し尽くしたのではないかと思いながら作っています。

1つだけ心がけていることは、剣道の雑誌をずっと作り続けなければいけないので、作る上で、剣道家の皆さんが不快になるようなことは極力書かないようにしています。ずっと剣道をしている方々と付き合っていくわけですから、剣道の先生方が読んで、明日も頑張ろうと思えるような記事を中心に作っています。ですから、取材させていただいた方、書かれた方ご本人を前にして「こういう風になりました、読んでみてください」と言えるようなスタンスで作っています。

安藤雄一郎（月刊剣道日本編集長）：剣道日本の安藤です。よろしくお願いいたします。

先ほど小林さんからありましたように、本誌は昭和51年の５月号から創刊しました。創刊号を持って参りました。スキージャーナルという社名からもわかるように、うちの社長である滝泰三は元々スキーの雑誌を出しておりました。ただ、二松学舎大学出身で剣道七段を持っていたものですから、「うちでも出せないか」ということになり、小沼宏至先生にご協力いただき、創刊したということを聞いております。最初の記事が一刀流宗家の笹森順造先生でした。１回目は亡くなった剣豪ではなくて、存命の方を記事にしたいというのが当時の編集長の思いだったようで、最もふさわしい人ということで笹森順造先生を特集として取り上げさせていただいたということです。

また、日本剣道形を、重岡昇先生に監修、森島健男先生と阿部三郎先生に演武していただいており

ます。そして、対談には柳屋小さん（５代目）先生と、当時としても今としても凄い面々だったと思います。対抗意識丸出しですよね。何としても剣道時代さんに追いつこうという猛烈な気合の入り方だったと誌面を見ても伝わってきます。これがあるから我われがいるわけで、そういう思いを引き継がなければならないなという気持ちはあります。時々昔のバックナンバーを見て気合を入れ直しています。

私は平成５年から本誌の編集に携わりました。編集長になったのは昨年からです。それまでは、鈴木・月岡という２人の編集長の下で、編集長の働き方というものを見てきました。剣道時代さんもそうだと思うのですが、ファッション誌であれば、ある世代の女性、などと読者層をはっきり特定できるのですが、剣道というのは老若男女の世界です。少年にも訴えたいですが、だからといって少年が読む記事ばかり書いていると、「全然俺が読める記事が無いぞ」とある先生に言われたこともあります。色々な年代の方に応えられる記事を作らなければならないということをまず悩みます。

ただ、我われの拙い調査によると、学生の読者層が非常に少ないのです。大学生の読者ががくんと減ります。高校・中学まではありがたいことに意外といます。そして大学に入って読まなくなり、お父さん・お母さんになってからまた読むというパターンが結構多いなという印象を受けます。お父さん・お母さんになってから自分もまたはじめるということもあるかもしれません。「リバ剣」という言葉があるように、１回中断していたけれど、また剣道をはじめた、というパターンもあります。あるいは、子どもが剣道をはじめたので、子どもを何とかしてあげたい、という思いから本誌を手に取ってくださるというパターンもあるようです。また、剣道時代さんも続けていますが、付録としてDVDをつけるということを長い間やってきました。効果はありました。剣道時代さんは未だに効果があるから続けているのだと思いますが、うちはその効果が相当見えなくなってきているところがあります。それはストリーム配信やYouTubeで簡単に結果が見られるからだと思います。結果を出すだけでは、あまり訴えかけることは出来ないので、少し違うこと、うちでしかやりきれないようなことを記事にしていかないと、買っていただく方にメリットがないということが編集部の中の意見として挙がっており、それを実際に形にできるようにしなければならないと思います。

せっかく編集長という役割をいただいたので、その辺を強く訴えていきたいと考えています。心がけていることについてですが、先ほど小林さんがおっしゃったことは、私たちも同じです。しかし、同時に痛いところを突くというのもうちのスタンスです。ちょっと耳の痛い話というところですね。本来もう少しあっても良い気がするのですが、現状ではちょっとしたところに入れています。「あそこのページは良いですね、痛いことを言っていますよね」という声を直接聞くこともあります。剣道をもう少し良くしていくために、見過ごさないようにしようということを訴えていくべきだと思います。当然、読者を獲得しなければいけないのですけれども、ある意味、剣道界を少しは啓蒙するのだというような自負心くらいは持っています。どこまでできるかはともかく、そういう自負心を持ってやらなければならない、というのは頭の片隅に置いています。

ベネット：読者層の話が出ましたが、学生は勉強をしないもので、あまり読まないようです。自分が載っていれば別でしょうが。中学・高校、また親になってから買うということですが、剣道時代さんの

方はどうでしょうか。読者層はどういう人が多いのでしょうか。

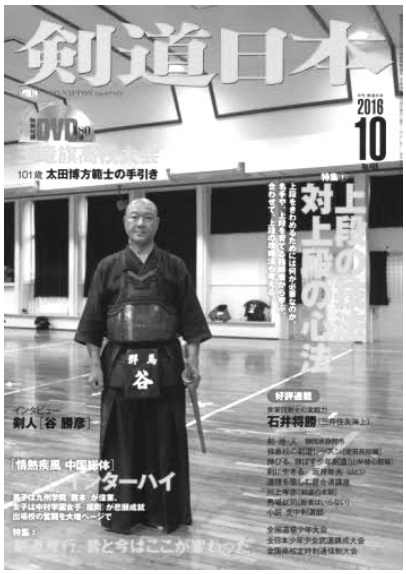
小林：やはり大人の方が多いですね。学生はあまり買わないです。30歳以上で、自分が剣道をやっている愛好家の方が多い気がします。

ベネット：今日のように剣道時代さんと剣道日本さんが一緒の場で話すという機会はあまりなかったと思うのですが、どうでしょうか。まずは安藤さんからお聞きしますが、自分たちと比べて、剣道時代さんは剣道日本さんにとってどういう存在でしょうか。

安藤：まず、先に出ている先行雑誌だということですよね。30年以上続いている雑誌というのは一般的に見ても凄いです。そんなに続く雑誌はなかなか他にないはずです。そこはいくら頑張っても剣道時代さんに追いつけないところで、しょうがないのですけれども、やはり追いかける存在であると思っています。ただ、当然お互いに読み合っていますので、こういうところに重点を置いているのかと思ったら、そこは違う部分で記事を書かせていただかなければと思います。

また、記事の内容が重なってしまうことが考えられます。例えば、話題の人が出てくると、剣道時代さんが先でこちらが後、あるいはこちらが先で剣道時代さんが後というようなことになりがちですが、私の場合はそれを何とかそうならないようにしたいなと思っています。真似をしないようにというか、同じ人を取り扱うにしても、少し違う視点でやりたいと思っています。

小林：安藤さんにほとんど言われてしまいましたが、雑誌が商業媒体として２種類ある競技はかなり少ないです。スポーツとあえて言いますが、専門誌が２誌あるスポーツは剣道と、テニス、スキー、そのくらいではないかと思います。その中で２誌あるということで、今、安藤さんがおっしゃったように中身を確認しながら、こういった切り口もあるのか、こういう考え方もあるのかと勉強させていただいているのが剣道日本さんだと思っています。私の場合は、良いものがあれば参考にさせていただき雑誌を作っています。ですから、どういう存在かと言えば、ライバル誌ではありますが、勉強させていただいている身近な媒体であるということになると思います。



ベネット：武道館が出している月刊武道という雑誌がありますが、１カ月で１万部出しています。その中でどれだけ売れているかというと700部のみです。あとは全部贈呈です。それが武道の情報発信や宣伝という武道館の役割なのですけれども。全剣連の統計に拠りますと、剣道の競技人口は150万人くらいだということです。150万人ということを考えると十分２つの雑誌があってもいいくらいのマーケットであるはずですが、実際のところ、どれくらい売れているのでしょうか。また、収入はどこから入ってくるのでしょうか。

小林：収入は雑誌の売り上げと、広告の売り上げ、この２つです。

ベネット：読者の数は増えているのでしょうか、それとも減っているのでしょうか。

安藤：はっきり言って減っています。剣道人口自体はそんなに減っているわけではないと思います。

百鬼史訓（日本武道学会会長）：統計学的に正確な情報はないのです。その150万というのも有段者数です。ですから、経験者はそれだけいると考えて良いと思います。50周年の時に武安前会長が出された数字が公的には一番正しいと思いますし、我われもそれを使用しています。剣道人口が減っているという点についても正確に捉えられていないと思います。それぞれの地方の剣道連盟で少子化現象が続いていることやその影響に関する声は聞こえます。小学生や道場連盟関係の登録者数が明らかに減っているということです。中学

校ではクラブの人数が減っており、チームが組めなくなっているようです。それは高校でも広がっているということですから子どもたちが少なくなっている傾向にあるかとは思います。それは中体連や高体連がホームページに出しているだけではなく、他にも公的な機関が出している統計数があるのではないでしょうか。それをインターネットから探せばもしかするとわかるかもしれません。その一方で、今、お年寄りや大人の方が増えていると思います。人口減少に比べると、ある程度フラットな状態を保っているということです。逆に考えれば、頑張っているということになりますよね。

私も今、武道の必修化について取り組んでいます。26年度の統計で言えば、中学生はだいたい350万人近くいます。それで、中体連が確認している剣道部の人数は9～10万人。クラブ活動で大体５～６番目くらいの多さです。授業としては、剣道は武道全体の中でだいたい40パーセントを下回るくらいの割合で行われています。ですから、だいたい150万くらいの子どもたちがおそらく剣道を実践することになると思います。

授業では子どもたちに剣道の楽しさや面白さを教えながら、教育目標を達成させることが大切です。運動的に言えば、継続してやっていきたいという子どもたちを増やすことが大切です。また、これまでは内向きの振興普及でしたが、今度は剣道以外の人々にどのように剣道を理解してもらえるかということを考え、アクションを起こそうとしています。メディアという外側の人たちにどのような形で剣道というもののイメージを話せるか、理解していただくか、そういう外向きのこともこれからは必要となってくるのではないかと思います。それには本を作ることが必要だと思います。

ベネット：少子化問題などで読者が減りつつあるということですが、Kendo Worldも同様ですね。世界中で剣道をやっている人は増えています。しかし、今はKendo World以外の情報源がたくさんあるのです。読者層が減っていることもあり、我われも広告収入に頼っている部分があります。ほぼボランティアになってしまうのですけれども。このようなことから広告収入についてお伺いしたいのですが、広告を出したいという業者は増えているのですか、それとも減っているのですか。

安藤：収入は読者と広告ですが、基本的には読者です。というのは読者がいなければ広告も出す意味がないからです。ですから絶対的に読者が優先だと思っています。読者を増やさないことには広告はついてこない。読者が減っている以上、広告も増えないということです。あるテナントの方には、「紙ではお客さんは来ないね」と既に言われております。そこはこれから紙媒体の大きなテーマになると思います。

ベネット：剣道時代さんはいかがですか。

小林：何年も前になるのですが、広告の売り上げは、テレビが１番、その次にラジオ、新聞、雑誌という順番だったと思います。しかし、もうだいぶ前にインターネットに雑誌が抜かれて、ラジオも抜かれているような状況です。広告の売り上げももちろん必要なのですが、やはりそれ以上に読んでくださる方をいかに増やすかというのが１つのテーマになっていますね。

ベネット：先ほども安藤さんがおっしゃったDVDについてですが、これも剣道をより多くの人に伝えるための新しい手の１つだと思います。今、話にありましたように、紙媒体がなかなか頼れない時代になってきています。その他にもこういうテクノロジーを使って実験的なことでも取り組んでいることは何かありますか。例えば電子書籍などそういうもので。

安藤：電子書籍は取り組んでいるところですが、進んでいるかというと、なかなか現実的な問題が引っかかって滞っているところです。ただ、やろうとしていることは確かです。

小林：今は紙と映像のみです。電子書籍も検討はしているのですが、うちではまだ具体的にやっていません。ただ、いずれはそういうこともやっていかなければいけないのかなというところです。

ベネット：自慢していいのかわかりませんが、DVDに関しては、Kendo Worldが最初だったと思います。2001年に全日本剣道選手権大会をビデオで撮って、当時はまだCD-ROMでしたが、付録として出したのです。画期的だったと思いますが、映像の作成に雑誌と同じくらいのお金がかかりました。ですから、付録として映像を付けると、２倍くらいのお金がかかってしまうということです。

何回かはやりましたけれども、これ以上はできないという時にちょうどYouTubeが出てきました。今、我われが導入しているのは、YouTubeチャンネルを作って映像を載せるという方法です。それを見る人は雑誌を読む人よりはるかに多いです。何万人という単位になります。我われも印刷をして在庫を置くという余裕はありません。置く場所もないし、何よりもそのお金がないわけですから。

Kendo Worldはいわゆる電子書籍、KindleとZinioに加えて、PODというのも使っています。日本ではあまり進んではいませんが、PODというのはPrint On Demandの略です。たくさん印刷して在庫を置くのではなくて、例えば、Kendo World をAmazonで注文すると、電子書籍か、紙か、選択することが出来ます。紙が良い場合は、その人が住んでいる場所の近くの印刷業者で印刷をし、製本をして届くようになっています。

質は非常に良いです。１回何千部を印刷して在庫を置くというのは相当お金がかかるのに、いつ売れるかがわかりません。PODには本当に救われました。もう１つは、剣道時代さん・剣道日本さんにはないと思うのですけれども、海外に送るとき、送ったはずなのに、行方不明になることが多かったのです。そしてクレームが来て、また送る。ひどいときは５回ほど送ることもありました。しかし、PODになってからはそういった問題が一気に無くなりました。テクノロジーという点に関しては、私たちは新しいものが出ればすぐ取り入れる。そうしないとやっていけないというところです。

もう１つだけ質問をさせていただきたいと思いますが、創刊が剣道時代は昭和49年、剣道日本は昭和51年ということですが、出来た当初と現在の剣道日本・剣道時代を見比べてみて、剣道自体がどのように変わってきていると思いますか。進化しているのか、退化しているのか、何と言っていいかわかりませんが、それをザッと見ると、流れが見えてくるのではないかと思います。

小林：まずは女子が増えたということだと思います。女子の試合もたくさん出来ていますし、その点が最も変わった点かと思います。

ベネット：技術的なことについてはいかがですか。

小林：剣道の技術、試合という点で言えば、現在の方が高度化していると思います。一本をとるための工夫を指導者の方が研究されているのが伝わってきます。もう１つは、皆さん長寿になってこられているので、私のイメージですと、10年前の70代の先生よりも今の70代の先生の方がお若く、以前の60代に近い動きをしており、10年くらい若くなっている印象を持っています。

安藤：大体、小林さんに言われてしまいましたけれども、技が狭小化しているのではないか、というのが私の実感です。記事もほぼ同じ技の連続だと感じています。他の技を紹介してもらえない場合もあるし、あるけど出さない、得意じゃないと謙遜されることもあります。出ばな小手、出ばな面、返し胴と皆さんの紹介される技が同じなので、「もっと面白い技ないですか？試合で色々打つじゃないですか」と聞くことも結構ありますが、「いやいや」とはぐらかされてしまいます。

私の目が足りないということもあるのかも知れませんが、実際に見ていて、皆さんやはり同じ技を打っているように見えてしまいます。逆に巻き技や突きなどを出していると非常に目立ちます。昔は右手に竹刀を持っての片手面などの記事も見られますが、私はそういう技にあまりお目にかかったことがないので、果たして昔はどのような技術が展開されていたのだろうかと思います。

（休憩）

ベネット：それでは後半に入ります。前半は小林さんと安藤さんに雑誌の歴史などをお話しいただきましたが、ここからはフロアの方と質疑応答していきたいと思います。まずは私の方から長尾先生に先ほどと同じような質問ですけれども、なぜ学生は読まないのでしょうか。別に皆、頭が悪いというわけではないと思うのですが。

長尾：学生はきちんと文章を書こうと思えば書けるし、読めと課題を出せば、読みます。しかし第１次情報は全て携帯電話です。だから読まないのではないでしょうか。LET'S KENDOなど結果だけであればサクッと見ることができるものがあるわけですから。

しかし、先ほどお２人が話していたようなそこから先のところを知りたいでしょうね。ここのところ学生が活躍しており、彼らの活躍などはテレビも追いかけています。しかし、テレビは自分たちの都合の良いように切り取りますよね。月刊誌で学生の読者層が増えるとすれば、自分たちと同じ世代の者がどういう考えを持ち、どういうトレーニングをして注目される存在になっていくのか、というところをテレビやインターネットとは違う視点から掘り下げてもらえれば、彼らはまた読むのではないかと思います。

ベネット：Kendo Worldもそうですが、読者層はバラバラですよね。子どもから中高生、大学生はさておき、また、30代になってきたら剣道を再開する方も多いというような話も伺いました。それを１つに絞るというのはなかなか難しい。非常に困っているけれども仕方がないなと思っているのは、我われの出したい記事の内容と読者が求めている内容のズレです。

我われとしては剣道の歴史・文化・哲学といった内容を出したいですし、それを出す意味があると思っています。けれども、それを読みたいという人はどれくらいいるのでしょうか。それを出すことで剣道界に貢献する部分は大きいと思うのですが、結局商売としては全然話にならないのです。以前、全剣連からKendo Worldを出そうということを言われました。要するにKendo Worldによって世界中に正しい剣道を知ってもらおうということです。

では、正しい剣道とは一体何かということになってしまうのですけれども。この辺りが剣道家として剣道雑誌を作る上で難しいところなのですが、何か貢献したいという気持ちがあります。Kendo Worldも剣道時代も剣道日本も元々はそうなのですが、全剣連からそういったことを言われるということは剣道の普及や発展を手伝ってほしいということなのだと思います。

そのことに関連して全剣連との関わりについてお聞きしたいと思います。連盟との関わりやスタンスはどのようなものでしょうか。慎重に動かないといけないところもあると思うのですが。

小林：大会の主催はほとんど全剣連ですから、結果等の情報をすぐにいただかないといけないので、しかるべき手順を踏んで取材させていただきます。

ベネット：では例えば、何か連盟を批判するようなことになると、かなり遠慮したり、慎重になることがあるのではないかと思いますが、今までにそういったことはありましたか？

小林：私が編集責任者になってからは特にありません。

安藤：割と批判的なことを言っている方だと思います。１パーセント分くらいの記事については批判的に書いています。例えば町道場に行くようなことがあると、全日本選手権などを見ている方は多いので、そこの先生から「あの試合の反則はどうなのか」というようなことは言われたりします。そういったところは記事に書いたりして、あまり遠慮をするということは意識していません。

長尾：両者のスタンスが良く出ていると思います。剣道時代さんは読者に向けてということが強いし、剣道日本さんは昔から批判的なことを平気で書いてこられた。それはある種両者のキャラクターです。それも分かった上で読者は読んでいるのではないかと思います。

安藤：確かに、創刊当時は今よりももっと凄まじいことを書いております。当時の学生の試合につい

て「全くなっていない」というようなことも書いています。今の我われはそれに比べると遠慮しているかと思います。

ベネット：他に皆さん何かございませんか。昔このような記事を読んで剣道観が変わったとか、印象に残っている記事であるとか何でも結構です。角先生いかがですか。

角（福岡教育大学名誉教授）：今日は聞き役に回ろうかと思っておりましたが、いくつかお話を聞きながら感じたことを述べたいと思います。

小林さんは先ほど「剣道の試合内容が高度化している」と、安藤さんは「単純化しすぎている」とおっしゃいました。私に言わせると、「卑怯者が竹刀を振り回している」としか言いようがない。それを批判する目というのはやはりあるのではないかと思います。おそらく学生の中にも同じ大学生の試合を見て「あれで勝つか」と思っている学生は少なくないと思います。結果はさっと見たい、それで終わりですが、批判的な内容が書いてあれば「やっぱりそうだよな」と思って読むのだと思います。

私は即座に知れる結果以外の中身について両論、あるいは三者の意見が出てくると、ほとんど考えることなく剣道をやっている学生たちにも考えさせることになるのではないかという気が致します。ベネットさんがおっしゃるように剣道を考えている学生というのはなかなかいないのではないかと思います。何かの手立てにしてやろう、名誉をとってやろうとは考えているのかも知れないけれども、ベネットさんがおっしゃるような哲学や伝統的な文化性を勉強したいと考えて大学の剣道部で稽古をしている子はごく一部の武道学科や大学を除いていないのではないでしょうか。しかし、考えさせる手立てはやはり中身に何か学生を引き付けるものが無ければ、という気が致しました。

ベネット：考えさせる…。どうしたらよいのでしょうか。

長尾：海外の人は形をよくやりますよね。彼らの方が形は上手い。日本の学生よりもはるかに真面目で、伝統文化を学ぼうとする姿勢が強い。剣道そのものの捉え方が全く違います。そういうところをターゲットにして引き付けるというのは非常に難しいのではないかという気が致します。

逆にKendo Worldはそういう方が訴えやすいのではないかとも思います。英語ですし、海外の読者層も形の意味や礼法の意味など、そういうものを求めているのではないでしょうか。日本の両誌が苦しいのはそういうところではないでしょうか。一番大きいマスの部分、学生から若手の剣道家が、今、角先生が言われたような感性しか持っていない、そういうことだと思います。

ベネット：我われは両誌に大変お世話になっており、その記事を使わせていただいております。当然、剣道歴によって違いますが、その中でも人気のあった記事が、「審査員の目」という記事で、“Hanshi says” と訳しました。特に今、指導に携わっている五段・六段クラス、あるいは七段クラスの先生方は、上の段の先生からアドバイスを受ける機会がほとんどありません。日本語が出来なければ読むこともできませんが、剣道の本当に深いところまで到達しようと思ったら、そこを勉強しなければならないと考え、この記事を翻訳しました。一応審査がメインポイントだったのですけれども、年をとって高段者になるにつれ、どういうことを考えたらいいのか、技術的な面と哲学的な面、両方が分かりやすく書かれていたので、非常に好評でした。

一部の人はそれがいいと言うのですが、最近になって、技のやり方、How to 突技、How to 面技というような記事が欲しいと言われます。要するに日本で活躍している選手の面打ちはどうなっているのか、どういう入り方をしているのか、どういう攻め方をするのか、という技術的なことに読者の興味が変わりつつあると感じています。良いことか悪いことかはわかりませんが、今まで「面打ちはこうだ」というように剣道指導要領に書いているようなことしか教わっていないわけですから、より高度な技に関心が出てきているようです。

我われもどうしようかと悩んでいるところなのですけれども、もっと取り入れなければいけないということでしょう。読者が求めていることに合わせて出すということと、我われにも剣道文化をどうやって保存するか、普及するかというポリシーがあるので、その辺りで矛盾するところが出てくるということですよね。他にはどうですか。コメントや質問はございませんか。

湯浅　晃（天理大学）：大学生が剣道関連の雑誌を読んでいないことと売れていないことは同じではないと思います。本学の体育学部の図書室に行くと学生たちは競技の雑誌しか読んでいません。雑誌コーナーにはあらゆる雑誌が並んでいますので、そこで読んでいるのかも知れません。

また、お聞きしたいのは、雑誌の編集にずっと携わってこられている中で、剣道を学んでいる方、あるいは成人になって専門的でなくても余暇にされている方が剣道のどんなところに魅力を感じて、あるいは改めて魅力を発見して、「よし、またやってみようか」と思うのか。また、いくら親が厳しくて道場に連れて行ったとしても子どもは好きでなければ続けていかないと思うのですが、子どもたちはどんなところに魅力を感じているとお考えなのか、お聞きしたいと思います。

安藤：色々な声を聴くので、キリがありませんが、高校生に「何でやっているの？」と聞くと「袴を着けてみたかった」と言われたことがあります。「そんなものなのか」と思いましたが、この意見は意外と多かったように思います。

また、子どもの指導者が「剣道は良いよ」と言う理由としては、「君たちはここで大きい声を張り上げても怒られないよ、逆に褒められるよ、教室で大きい声を出したら叱られるだろう？ここでは遠慮なく出していいよ、むしろ褒めるからな」というようなことがあります。そんなところが剣道の特長なのかなと思っています。

小林：最近の傾向としては親に勧められてやる子が多いですが、比較的続いている子は試合に勝つと楽しいからというのが大きな継続理由になっていると思います。我われが取材する対象となるのは全国大会クラスの大きな試合です。そこで勝ってくる子たちは、一生懸命にやって勝つ喜びを知っている子たちなので、そういう話にもなるのかなと思います。大人の方は自分の健康の維持のため、もう１つは昇段審査を目標として、この２つが今は多いのかなと思います。

湯浅：もう１つ。確か私が学生だった頃に剣道時代が創刊されたと記憶しているのですが、創刊号は赤胴を付けた女の子が表紙に写っていませんでしたか。

小林：はい、そうです。

湯浅：とても印象深かったのを覚えています。女性の人口が多くなってきたと述べられましたが、逆に剣道時代・剣道日本という雑誌が女性の剣道熱を揚げてきたということも大きいかと思います。ちょうど高体連で湯野正憲先生が女子の剣道を盛り上げていこうとする時期と多分重なっていると思うのです。創刊号の表紙に中高生くらいの赤胴を付けた女の子の写真を載せたというのはやはり先見の明があったと思います。

酒井利信（筑波大学）：先ほど安藤さんが「剣道界を啓蒙していくのだ」と、非常に頼もしいことをおっしゃっていました。Kendo Worldさんもあるのですけれども、国際化していく中でどう考えておられるのか、今後どう進めていこうと思われるのかということと、話しにくいかもしれませんが、オリンピックのことをどう考えておられるのか、お聞きしたいと思います。

安藤：個人的な意見ですが、１つの競技において、ある特定の国が優勝し続けているというのは決して健全なことではないというのが私の思いです。本来、世界大会というのはそういうものではないという気がします。

ただし、それに向けての下地という部分で言うと、圧倒的に日本が上回っているのが現実で、子どもの大会数、試合数、練成会の数は半端な数ではありません。あれを外国の子どもがやっているかと言うと、まずそれはあり得

ないので、この現状は変えようがないというようにも感じます。しかし、世界大会はこのままでいいのかなとも疑問に思います。そこで、「世界の演武大会だったらどうなの？」という意見をおっしゃる先生もいらっしゃって、競技としての側面ではなく、演武として剣道はいつまでも続けられることを世界中に発信していくためのイベントは確かに必要なのではないかと感じています。

人口を増やすという点に関しては、我われにとって商売がしやすくなる非常にありがたいことであります。ただ、条件に関して難しい点もあります。例えば剣道具の値段、あるいは竹刀を買ったとしてもイランで使ったら２振りで壊れたという話があるように、竹の素材の事や気象条件・生活条件などの壁があるので、その辺りをクリアすることが大変なのではないかと思っているところです。

小林：国際化を外国の人が剣道をやるということで捉えるのであれば、今後、先生方の努力もあるのでまだまだ増えるのではないかと思います。

しかし、世界大会などを拝見していると各国の選手のレベルも上がり、指導者も非常に高段者が増えてきています。この辺りの指導者のスキルをさらにレベルアップさせるということに関しては普及の仕方を変えていかなければならない時期に来ているのかなと勝手に思っています。日本では１人の先生に習って何年もかけて修行していくのが剣道だと言いながらも、日本の先生を永住的に派遣することも今の段階では出来ていないと思います。それくらい何年もかけて修行していかないと剣道は身につかないということであれば、同じような学ぶシステムも必要なのではないかと感じることもあります。

オリンピックの問題に関しては反対も賛成もありませんが、現実問題としてオリンピックはヨーロッパ中心のものであると思っているので、剣道が入るのはかなり難しいのではないかと個人的には思っています。本当に入りたいのであれば、国際剣道連盟の加盟国数がまだまだオリンピックに入る基準を満たしていませんので、その辺りからクリアしていかなければならないのではと思います。

安藤：完全に個人的な意見ですが剣道はオリンピックに相応しくないと思います。有効打突に関する考え方が単なるポイントではありませんので、この線を越えたら一本になると言い切れないものをオリンピック種目にするのは難しいと思います。私はそういう意味で他の種目でもオリンピックの中に入っていていいのかと感じる種目がありますので、あまり相応しいという気はしていません。

ベネット：先ほど演武という話が出ましたが、実際に国際演武大会が行われていますよね。コンバットゲームズはそれに近いものではないかと思います。それこそオリンピックとのつながりがあります。コンバットゲームズはこれまで北京とロシアでやりました。一応、勝負は着きますが、子どもから大人までの演武大会です。剣道という競技、剣道という文化は誰でも参加できるこんな素晴らしい文化ですよとアピールをすることが出来る場だと思うのです。

世界大会では１回だけアメリカに敗れたものの、日本がずっと勝っています。しかし、この間の世界大会を見ても分かるように少しずつ全体のレベルが上がってきています。日本は試合をする回数が明らかに多いですが、勝負というのは一瞬ですから分かりません。一方で、外国人選手としては常に追い求めているものがあるから、楽しいという意見もあります。日本がずっと勝ってもそれで良いという考え方の人もいるのです。

柴田一浩（流通経済大学）：学習指導要領で全ての子どもたちに学ばせる内容の見直しの作業が間もなく始まろうとしております。今、中学校１・２年生までは柔道・剣道・相撲のいずれかは学んでいるのですけれども３年生以降はバスケットボールなど球技との選択なので圧倒的に武道をやめてしまう子が多いです。個人的な意見で結構ですので、剣道の良さや剣道を学ぶ意義・価値は何か教えていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

安藤：先ほどと重複しますが、まず見た目ですね。剣道着・袴を着ているということは意外に効果があるものだと思います。トレーニングパンツで打ったりするのとは違う気がします。

そして大きな声を出せるということです。野球・サッカーでも大きな声を出していますが、声を出しているという自覚が外へ抜けていってしまう。これに対して剣道の場合は声が出ていきますが、返ってきます。トラックの運転手が、

大声で歌を歌いながら運転しているのと同じ心境なのかなと思います。私も車の中で歌ったりしますが、気持ちが良いものだと思うのですよね。

また、剣道を続けてある程度の段を取得して、海外に行ったとき、首都や大都市であれば大概は稽古が出来ると思います。しかもそこには日本人コミュニティーやアジア圏のコミュニティーが出来ていたりするので、上手くいけば仕事のつながりをどこかで得られることもあるようです。

続けていると、海外へ行ったときにネットワークが作りやすいというのは剣道のメリットかも知れません。他のスポーツ種目であれば、そういうところに行っても、外国の方に囲まれてオロオロすることが多いのかも知れませんが、剣道であれば助けてもらえるのではないかと思います。すみません、少し中学生の話から逸れました。

小林：今の柴田先生のご質問は、中学生にどうしたら剣道を選択してもらえるか、そしてその勧め方ということだと思うのですけれども、やはり私は礼儀作法という点が一番だと思っています。

毎年、年末に勝浦の国際武道大学が主催されている大会に取材に行かせていただいています。そこである写真屋さんのカメラマンと話をしていると、「剣道の開会式・閉会式が一番整然としていて気持ちが良い、これは他の競技には全くない」と言われます。私が剣道の雑誌を作っているからサービスも含めて言っていることだと思いますが、これは本当にそうなのだろうと思います。

長い間、正座をしているとか、喋らないでいるとか、立っているということが非常に難しくなっているという現状があるので、「剣道の時間くらいは静かにして日本を学ぼうじゃないか」ということは勧められる理由の１つになるのではないかと思います。その際にして欲しいのは、安藤さんもおっしゃっていましたが、剣道着と袴で授業が出来れば、より効果的なのではないでしょうか。

ベネット：角先生、今の話についていかがでしょうか。

角：剣道着・袴を着て授業が出来ているのは全体の何パーセントくらいでしょうか。おっしゃる通りだと思います。まず、剣道着と袴を着させることで数時間のことかも知れないけれども、「ああ、剣道をやった」と一生忘れないだろうし、またやってみようという気になる。

これに対する手立て、あるいは周りから「子どもたちにとって魅力的なことなのだ」というアピールが今一つ不足している気が致します。研究会にしても指導法の研究、興味を引き付ける研究は多くなされていますが、そんなに苦労しなくても、剣道着と袴を１枚ずつ揃えてあげて、きちんと着させた後、１人ずつ写真を撮って、授業後にあげれば、これより良いものはないなと思います。

それから対人的に声を掛け合い、直接的にぶつかり合う、しかも安全性が高い、この魅力は大いに謳う必要があるかと思います。今、１対１でコミュニケーションをすることや、掴みあうということは家庭でもないわけですから、約束事の中で叩き合っていい、というのは大きな魅力だと思います。

百鬼：２年間、色々な中学校を訪問しましたが、剣道着を着けて授業をやっていたところは１か所だけでしたね。しかし、その中学校は素晴らしいモデル校でした。子どもたちのモチベーションが極め

て高く、短い間に信じられないほど技能を習得するのです。これは剣道専門家も唖然としているくらいです。ほとんどが先ほども言ったようにトレーニングウエアでやっていると思うのですけれども、私のいた大学も200着分の剣道着と袴を購入しました。選択制の授業でしたので、学生に頼んで受講してもらいましたが、剣道着と袴を購入して以来、「頼むから他に回ってくれ」というくらい受講生が増えました。特に女性が圧倒的に増えました。最初は剣道着と袴を着させて記念撮影ＯＫですよ。そういう形でやると礼儀作法も自然にできるのです。

そういう環境づくりというのは、絶対やった方が良いと思うのですが、ご存知のように予算のかかることなのです。そこで剣道着・袴に関しては文科省と接触しない限り、なかなか難しいのではないかと思います。ただし、市町村の協力関係や理解度が高ければ、先ほど申し上げたような形で素晴らしい授業が展開できている。授業協力者が３人いる中でやっているものですから、子どもたちは驚くほど上手になっていくわけです。そういう意味では、環境の整備も必要になってくるのではないかと思います。

長尾：今の話で思い出したのですが、東京農工大学の一般体育で先生ご自身が白道着・白袴を着けてこういうのをやりますと言ったら学生がワッと集まりましたよね。予算的に余裕があればそういうやり方が出来ます。一方、かつて埼玉大学で加藤純一先生が「私の授業では柳生新陰流をやります」と言ったところ、その頃あまり剣道に集まらなかったのに「柳生新陰流の形ならやります」ということで学生がワッと集まったのを覚えています。逆に予算の無いところであれば、そういったやり方もあるのかなと思います。

大保木：当時、袋しないが２万円もしたので、それはそれで予算が要りました。ですが、今なら安くできると思いますし、なかなか面白いとは思います。

ついでに質問をさせて頂きます。剣道の雑誌を出すにあたって、これだけは絶対に外せない、という社の柱のようなものがもしおありでしたら教えてください。

剣道時代が創刊したとき、私たちにとって非常に良かったのが、ニュース性が速かったことです。記録がすぐ出てくる。しばらくして剣道日本が出てきたとき、全然違うコンセプトだと思いました。写真もとてもきれいでした。

記事では、角先生がお書きになっているように連載物がありますよね。これは１つ面白いなと思います。

また、トッププレイヤーの技術の解説については、「こういうことを考えているのか、なるほど」と勉強になります。これらは雑誌ではないと出来ないことですよね。そのように特集を組む時にこれだけは絶対に外せないということがあったら教えていただきたいと思います。

小林：先生がおっしゃるような大きなことではないのですけれども、やはり読者は何を求めているのか、というのが私は一番ですね。仮説ですが、今、大保木先生がおっしゃられたように、試合に勝ちたい、昇段したい、稽古で強くなりたい、という欲求に応えることが立ち読みから購読に変わるところだと考えています。これだけは外せないという強いものですが、最初に申し上げたようにご本人を前にしてそれを見せられるかどうか、というのが私たちの記事のスタンスでして、たとえ厳しい事でも本人に書きましたと言えるのであれば、記事に書いても良いと思います。そこを１つの基準にしています。

安藤：商業誌である以上、やはり売れる記事、これがまず一番大事にしなければいけない部分です。ここを無くしてはどうにもならないと思っています。それから先ほど小林さんがおっしゃったように、勝ちたいというところに流れつつ

あるのが現状ですから、こちらもそこに同化するようにしています。そして出来れば、旬な方の技術とか考え方を紹介できていればなお良いだろうと思います。技術は大体似通ってしまいますので、取材する側としては、その裏にある考え方、思考法というところになるべく切り込んでいきたいなと思っています。大体長くキャリアを積んだ方の行き着くところは一緒だとしても、そこに行きつくまでの考え方というのは本当に十人十色で、そこはいつも聞いていて面白いなと思います。その面白かったところをできるだけお伝えしたいと考えています。

ただ、喋ってくれないと記事にできないものですから、なるべく話を引き出すようにします。そうすると「あ、まずい」という企業秘密のような話を全部言われる方もいます。それを全部出すかどうかについては、「この後、この人大丈夫かな、勝てるかな」というようなところを少し考慮します。

あとは売れるということにつながらない部分も全くの０にはしたくないというのが私の考えです。少し皆様に耳の痛い部分もあえて出していかないといけないと思います。少しでも剣道界を魅力のあるものにしていければという気持ちがありますので、そういう記事であっても必要であれば出したいと考えています。

大保木：剣道日本さんがかなり長い間「剣道聞き書き」という記事を掲載しておられましたが、本にしないということを伺いました。あの記事は非常に史料性が高いと思います。もう亡くなった先生方が何を考えていたのかが窺え、私にとっては史料的価値が高く、持っている分はファイリングしてあります。それと同じように、今の範士の先生方が何を考えて、なぜ剣道を一生懸命やっていたのか、そういうところを言葉にしていく作業が非常に大事だと思います。その辺はいかがでしょうか。

小林：それは雑誌でしかできない仕事ですので、私も意識しており、なるべく先生方の話は残しておくように心がけています。技術のこともそうですし、剣道の考え方・取り組み方はやはり活字でしか残すしかないと思います。それについては、戦後の１期生の先生方も対象になってきているのかなというイメージで取り組んでいます。

大保木：それに関連して地域で指導に携わり頑張っておられる先生方がいらっしゃいますよね。雑誌というのはそのように埋もれていて見えない部分を発掘していくというのも大きな仕事だと思います。その辺はいかがですか。

小林：おっしゃる通りで、やらなければいけないところだと思います。

大保木：道場訪問ということもあると思います。道場の指導者同士の関係もありますし、指導者と子どもたちとの関係、また、子ども同士の関係もある。お互いにどう思っているのかというところが非常に面白いですよね。卒論などを書かせるとその辺りに興味を持つ学生が多かったです。私は雑誌であればそれができると思います。

安藤：発掘作業という点に関しては我われの収集力不足というのは確かにあると思います。そこは編集部の人間が個々に努力して発掘できるようにしなければならないというのはあります。それから折角ですから、情報をご提供いただければと思います。よろしくお願いいたします。

武藤健一郎（成蹊大学）：私自身がインターネットでストリーム配信をしている全剣連のスタッフの１人として雑誌の売り上げを奪っているのではないかと思ったりもしています。まず、スポーツ雑誌として国内競技連盟が結果を公式にすぐに発表することにより、どれくらい雑誌は売れなくなるのですか。

安藤：具体的な数字は言えませんが、確実に言えると思います。

武藤：売り上げが落ちているというのは事実ですね。それが出されることによって、大会レポートの割いているページ数が減ったと思いますが、それでいいのかということなのです。後発として大会レポートをきちんとまとめ、咀嚼して伝えることによって実は増やすやり方もあったのではないかと思いますし、先ほどベネット先生がおっしゃった歴史・哲学・文化というものを誰かがきちんと言って良し悪しを踏まえた上でのレポートもあったのではないかと思います。雑誌全体で何か哲学というものがしっかりとしていれば、大会レポートをしながら伝えるべき方法があると思います。

インターネットで生の動画をポンと出しても個々の感受性にしか訴えられないので、ある方向性を示すということが、大切だと思います。逆に記事を見てから映像を見に行けばいいじゃないかとタイ

アップするくらいの腹積りがあってもいいのではないかと最近思っています。だんだんインターネットの見方も変わってきています。試合をピックアップしてこれが素晴らしいという報告をしたら映像とタイアップし、発信するというやり方もあるのではないかと思います。

小林：全ての大会は出来ませんが、うちの大会レポートは映像と連動しています。東西対抗、全日本選手権、八段戦については、大会が教材であるというスタンスを採っており、勝ち負けはもちろん大事なのですけれども、それよりもどこを学びのポイントとするのかをイメージして書くようにしています。ですから、例えば、打つ機会が良かった、なぜこういう機会が生まれたのか、など、勝ち負けよりも学びのポイントに焦点を当てて、ここ数年はレポートを作るようにしています。ですから先生が質問されたように映像と連動というのはもちろんありで、記事を読んでから、映像を見ることで、「こういうことだったのか」というような形になれば、雑誌はもういらないと言われないようになるのかなと思います。

安藤：大会レポートが減ったというのは確かにそうです。まず１つは少年剣道や高校で顕著だと思いますが、レポートした時に大体上位に来るところが同じであるということです。いつもこのチームが優勝で、２位、３位と毎回同じような号になってしまい、先月と同じじゃないかということがあり得ます。

先ほどご指摘されたように、結果を出すというスタイルはもう完全に限界だと感じています。ただ、剣道の良さというのは、見た目の良さや躍動感など写真に切り取った時の得も言われぬ独特の魅力があるように思いますので、減らすとは言ってもなるべく写真は大きく際立たせるように使うなど、デザインを使って剣道の凄さを伝えられるようにしたいと思います。

学びのポイントについては、こちらの弱点であると感じていますので、そこに関しては何とかできないものかと考え中なのですが、企業秘密ということで、検討中とお答えしておきます。

ベネット：ちょうど時間なのでこれで終わりたいと思います。剣道時代、剣道日本、両誌の売り上げが悪くなり消えてしまえば貴重な競技誌が消えてしまうということなので剣道界でサポートしていかなければならないと思います。また、今日お越しいただいたお２人が何かこれから売り上げを良くするヒントを得ていただけたのであれば嬉しい限りです。これからも長いお付き合いになると思いますが、よろしくお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。

【海外研修報告】

ニュージーランドのスポーツの捉え方と剣道

齋藤　実（専修大学経営学部／スポーツ研究所）

ニュージーランドは日本の約4分の3の国土を持つが、人口は約424万人（2013年国勢調査）ほどで、人口密度に換算すると、日本が336.22人／平方キロメートルであるのに対して、ニュージーランドは16.88人／平方キロメートルと日本の約1／20程度である。どの町でも小さな市街地を抜けると、すぐに広大な牧場が遥か彼方まで広がる光景を見ることができる。

決して大きくないこの国が、世界的に知られている理由の一つにラグビーがある。代表チームであるオールブラックスは、1987年に始まり４年に１度行われるワールドカップにおいて、これまでの８回の開催中３回の優勝、２位１回、３位３回を誇り、現在も世界ランキング１位に位置している。ニュージーランドのラグビーユニオンへの登録クラブ数は600クラブであり、プレーヤーとしての登録者は146,893人である（2015年7月現在）。日本ラグビーフットボール協会に登録しているクラブ数は1200余、競技人口は約４万人（個人登録制度による、2012年）と比べると、ニュージーランドにおいてラグビーが国民スポーツとして位置付けられている様子が窺える。

また、ニュージーランドのスポーツ政策にも注目が集まっている。その理由が夏季オリンピックにおけるメダルの獲得数である。第30回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）では13個のメダルを獲得し、そのうち6個が金メダルであり、国別順位は15位であった。人口当たりのメダル獲得率を比較すると、グレナダが約11万人に１個、ジャマイカが約30万人に１個に続き、ニュージーランドは約40万人に１個の割合であり、参加国中３番目の高率であった。なお、日本のメダル獲得率は335万人に１個の割合であった。

トップアスリートの活躍のみならず、ニュージーランドは国民のスポーツ参加率が高い国としても知られている。日本の成人における週１回のスポーツ参加率は47.5％（2014年）であったのに対し、ほぼ同時期に行われたニュージーランドの身体活動およびスポーツ活動調査では、74％（2013-14年）の成人が週に１回以上スポーツもしくはリクリエーションに参加したことが報告されている。また、併せて１年間に100万人の成人がスポーツとリクリエーションのボランティアに参加したことも報告されており、これは全国民の約１／４に相当する数である。

スポーツの目覚ましい活躍が光るニュージーランドではあるが、もう一点興味を持っていた点があった。日本でいうオイルショックの時代である1970年代前半にニュージーランドは経済破綻を起こし、財政と経済の立て直しをする際、同時に行政改革にも着手した（ロジャーノミクスと呼ばれる）。中央省庁の改革や公共部門の見直し、公益法人の再編・民営化・民間部門への売却により小さな政府となることを目指した。学校教育もそ

の一環として改革が進められ、現在も世界に例が少ないと言われる教育システムが作り上げられた。行政による教育委員会は廃止され、学校経営の多くの権限を各学校に委譲、その受け皿としてThe Board of Trustee(学校理事会)の設置がなされた。このことにより、学校が独立した強い裁量権を持つことになり、国の作成したナショナルカリキュラムはベースとなるものの、独自の学校運営がなされることとなった。昨今の日本においては、地域による教育力の向上や総合型地域スポーツクラブの設置など、「地域」がキーワードになっている。ニュージーランドにおける学校教育の中で、体育やスポーツがどのように取り上げられているのか、地域の教育にどのように関わっているのか、このことも興味深い点であった。

一方の剣道である。私はニュージーランドの剣道には強い印象を持っていた。日本代表チームのスタッフとして帯同させていただいた第１２回世界剣道選手権大会（グラスゴー）の練習会場において、アレキサンダー・ベネット氏率いるニュージーランド代表チームは、他のどこの国よりも日本代表チームに近い所作事を行い、気合いの篭った素振りや激しい稽古を行っていた。その大会の団体戦では予選リーグを突破することはできなかったが、第１５回世界剣道選手権大会（サンパウロ）においてベスト８に躍進するという活躍を見せている。その後のアレキサンダー・ベネット氏は日本武道学会や剣道専門分科会での活躍のみならず、日本武道に関する書籍を多数出版し、英語での剣道専門ウェブサイトのKendo Worldの立ち上げ、さらには各種メディアへも登場し、今や日本でも有数の武道研究者の一人となった。氏の存在は、私にとってニュージーランドではどのように剣道が行われているのか、ニュージーランドにおいて剣道はどのように捉えられているのかについて興味を抱かせるのに十分であった。

所属する大学の制度である在外研究員の機会が与えられた平成２８年度。私は迷わずニュージーランドへの渡航を選択し、ベネット氏に相談をした。ベネット氏は、瞬く間に現地に連絡、受け入れ先として氏の卒業大学であるカンタベリー大学が決定し、ニュージーランドの第２の都市であるクライストチャーチ市に滞在することになった。

スポーツが広く市民の生活に浸透しているニュージーランドでは、スポーツはどのような位置付けなのか、学校の体育およびクラブスポーツはどのように行われているのか、初めての海外生活で何を学ぶことができるのかという強い興味と、トラブルなく生活ができるのだろうかという不安を抱きながら、家族と共にスーツケース８個と３つの剣道具（私と娘２人分）を持って、滞在先であるクライストチャーチ市に渡航した。

◎スポーツに触れる機会が多いニュージーランド

クライストチャーチ市は、南島の東海岸中央に位置するニュージーランドの第２の人口を持つ市である。人口は341,469人で、市の面積の全体は1,426平方キロメートル、都市部とされる範囲は608平方キロメートルである。ニュージーランドで最も広いカンタベリー平野にある当市では、市内の至るところにラグビーグラウンドが複数面確保できるような天然芝の広大な公園を数多くみることができる。計算をしてみたところ、１人当たりの公園面積は、私の自宅がある東京都町田市と比較して20倍以上もあった。

市が管理する総合スポーツ施設（Recreation & Sport Facilities）は10箇所あり、それぞれに広大なグラウントとフィットネスジム、テニスコート、ならびにプールなどが備わっている。スポーツ施設として管理されているグラウンド（Sports Grounds and Parks）は82箇所あり、それぞれのグラウンドは区分けされて各競技団体に貸し出されている。区分けされたグラウンドの数は337面にもおよび、調査時（冬季）においては、

ラグビーユニオン（100面）、ラグビーリーグ（35面）、サッカー（194面）、ホッケー（8面）が使用していた。また、自転車（Bike）のコースとして、ファミリーサイクリングコースが5箇所、マウンテンバイクコースが26箇所、ロードサイクリングコースが5箇所登録されている。その他にも、市ではアクティビティ（Activities）の名で様々なリクリエーショナルスポーツの施設を運営している。なお、市街地の主な道路には自転車専用レーンがあり、通勤や通学に自転車がよく利用されていた。

家族とともに現地で生活を始めて早々に、娘が通う学校の教育システムに日本と大きな違いを感じることになった。ニュージーランドの義務教育は6歳から16歳の期間であり、5歳の誕生日からプライマリースクール（小学校）への入学が許可される。プライマリースクールは11歳までのスクールと、11歳から13歳までの中学校にあたるインターミディエイトスクールを兼ねたフルプライマリースクールがある。13歳から18歳はセカンダリースクールに通学する。セカンダリースクールを終えると就職をするか、もしくは就職のための専門学校、あるいは大学やポリテクと呼ばれる学位を出す専門校に進学をするが、進学のための受験制度は存在しない。進学の際には、セカンダリースクールで獲得した単位とそのグレードが評価される。このことから、学習塾や進学塾は一部留学生や他国への進学を考える子どもに対するものがいくつかは存在するが、日本のような受験戦争は起こらない（塾に通うのは中国や韓国、日本からの移民者の子どもに多い）。学校はプライマリースクールもセカンダリースクールも４学期制をとっており、1学期は1月下旬～4月上旬、2学期は4月下旬～7月上旬、３学期は7月下旬～9月下旬、４学期は10月中旬～12月中旬である。

長女、次女ともに現地のセカンダリースクールとプライマリースクールに入学したが、セカンダリースクールは14時20分、プライマリースクールは15時ちょうどと、いずれにおいても日本よりも早い時間に授業が終了し、放課後の時間が多く確保されていた。当初、プライマリースクールよりもセカンダリースクールの方が早く授業が終了するように時間が組まれていることを不思議に思ったが、ニュージーランドにおける子どもに対する法律が関わっていることがわかった。ニュージーランドでは法律において「14歳未満の子どもは適切な保護者の監督下と世話なしで１人にさせてはならない」ことが定められている。そのため、多くの保護者はその時間に合わせて退社し、学校まで迎えに行く、あるいは子どもを自宅に迎い入れている。一方、14歳になると留守番とベビーシッターをすることが可能となることが法律で定められている。すなわち、セカンダリースクールがプライマリースクールよりも早く授業が終わるということは、14歳以上の兄や姉が弟や妹を迎えに行き、保護者の監督なしで自宅にいることができるようにする配慮の一つであった。

この配慮で生まれた時間において、受験勉強のない子どもは前述したような広大な公園やグラウンドにて友人とスポーツに興じたり、家事の手伝い、趣味や宿題をするなどをして過ごすことができるようになっていた。この時間に合わせて、スポーツやリクリエーションをはじめとする様々なクラブやアフタースクール講座も開講されており、多くの子どもがこれらに参加をしている。保護者もその時間には仕事を終えていることから、クラブやスクールのボランティア、サポートに積極的に参加する光景が見られた。このことも、スポーツへのボランティアが盛んな理由の一つであろう。娘２人も放課後に多くの時間を得ることができ、クライストチャーチ市にある２つの剣道クラブのうちの青稲剣友会に通わせていただくことができた。青稲剣友会は月（一般）、水（キッズクラスと大人の初心者クラス）、金（キッズクラス）、土（一般）の週４日のべ５回の稽古が行われており、その全てに私と娘２人は参加することができた。特にキッズクラスにおいては、保護者が常に道場にいて、ボランティアとし

てサポートに努めていた点が印象的であった。

◎　ニュージーランドにおける スポーツの捉え方

次女が通うプライマリースクールの体育の授業を複数回調査することができた。その中で２つの特徴に興味を持った。

その１つは「ハカ」である。ハカはラグビーのニュージーランド代表チームがゲーム前に行うデモンストレーションとして知られる、ニュージーランドの先住民族マオリ族のダンスである。戦士が戦いの前に行う相手を威嚇するダンスのみならず、相手や自然に対する敬意や感謝の意を表したり、死者の御霊を供養し哀悼の意を表すダンスもある。学校の体育の授業では頻繁に練習を行っており、また定期的に行なわれている学校ごとの対抗戦のゲーム前にもお互いで披露しあっている。

この背景には、保健体育のナショナルカリキュラムが関係している。カリキュラムには大きく２つの特徴的な視点があり、その１つは、社会性に関する視点（Socio-Critical）、もう１つは二文化（Bi-Cultural）の視点である。すなわち、保健体育の時間において、社会性と二文化の教育を行うこととされているのである。これには、ニュージーランドの国家の成り立ちや、現在も進められている移民政策に起因している。ある時、次女の通うプライマリースクールで、児童のパレードが行われた。このパレードは、児童それぞれのナショナリティを理解し合うことを目的としており、両親の国籍別にグループを作ってパレードを行なうのだが、驚くことに41カ国のグループに分かれてパレードが行われていた。

保健体育の時間においては、イギリスの植民地から建国した成り立ちと、先住民族のマオリとの二文化について身体運動を通じて理解すること、またナショナリティの違いを社会性の獲得を持って解決することを狙っていると考えられる。この取り組みは子どもたちに深く浸透しているようであった。学校内では、肌の色などの身体的な差異や英語のイントネーションの違い、生活習慣や食習慣の違いなど、国籍や民族の違いが問題になることはないようだった。言葉に苦労する娘も仲間外れやいじめを受けることなく、困ったことがあれば必ず誰かが手助けを買って出てくれたという。それぞれが持つ民族の差を理解し尊重する態度は、私にとって目を引くことであった。

もう１つの興味を惹かれた点は、「スポーツは楽しむもの」ということである。プライマリースクールで行われていた陸上記録会を調査した。投てき種目、跳躍種目、短距離走などが行われ、10名程度のグループですべての種目をローテーションで行っていた。その１つの長距離走を見ていた際、全力で走る子どもがいる一方、数名は走ることもなくゆっくりと歩いていた。先生やサポートに来ている保護者も走ることを促すこともなく、周りにいる仲間も特に声かけをすることもない。不思議に思い、先生に「なぜ彼らは走らないのか？彼らを応援しないのか？」と聞いたところ「彼らは走りたくないのだろう。他の種目で彼らの得意なものがある」との返答であった。

セカンダリースクールの調査においては、長女が通う学校の課外スポーツの調査を行った。その学校では、水曜日と土曜日がスポーツ活動の日に当てられていて、水曜日は合同練習、土曜日はゲームデーと位置付けられていた。また、課外スポーツは、サマースポーツとウィンタースポーツに分けられ、人気の高いラグビーでさえウィンタースポーツに置かれ、サマーシーズンには行われていなかった。生徒はシーズンで展開されているスポーツからいくつかを選択し、様々なスポーツをゲームとして楽しんでいた。土曜日には必ずゲームが行われることから、対戦相手の調整（マッチメイク）や試合場の確保が鍵になる。課外スポーツは「ス

ポーツを楽しむこと」を目的にしていることから、決して補欠を作ることはせず、競技レベルに合わせたマッチメイク、リーグ戦が企画・運営されていた。

ニュージーランドのセカンダリースクールには、体育教員の他にスポーツコーディネーター（Sports Co-ordinator）が配置されており、学内におけるスポーツの諸活動やスポーツイベントを調整する他、近隣のスクールや地域スポーツ財団（体育協会に近い）やセカンダリースクールスポーツ評議会（高体連に近い）、地域のスポーツクラブなどと連携を取りながら、学校の課外スポーツを運営している。調査対象の学校にも１名のスポーツコーディネーターが敷設の体育館内にオフィスを構え、学内および学外のスポーツのコーディネートを行っていた。

この２つの事例は、ニュージーランドにおけるスポーツの捉え方が、日本と大きく異なっていることを想像させた。日本の小学校の体育において、もし真剣に授業に取り組んでいない子どもがいた場合には、本人がたとえ嫌がったとしても、注意をしたり動機付けをして真剣に取り組むように促すことだろう。また、毎日のように専門的に行われる高校の課外スポーツ（部活動）と異なり、ニュージーランドのそれは専門性よりも遊戯性を重視し、様々なスポーツをゲームとして楽しむことを狙っていた。この日本との差には、ニュージーランドでは日本と異なったスポーツの捉え方があるはずという疑問を抱え、ナショナルカリキュラムの保健体育の担当責任者である、カンタベリー大学のイアン・カルパン教授にインタビューをする機会を持った。

インタビューでは、「スポーツの教育効果についてどのように考えているか」と尋ねた。社会性の獲得や、健康への好影響などの効果はあるとの回答は得られたが、教授からは予想外の回答が返された。「君の言うスポーツの教育効果についてはわかる。しかし、ニュージーランドでは教育効果を得ようとしてスポーツは行わない。スポーツは楽しむために行うのであって、その結果として教育的な効果はあるだろう。しかしそのためにスポーツを行うことはない。スポーツを手段として何かを得ようとする行為はドーピングなどの不正行為にもつながることもあり、時に間違った方向に進んでしまう要因になるだろう」。

スポーツの捉え方として、「スポーツ目的論」と「スポーツ手段論」の考え方がある。スポーツ目的論は、スポーツそのものの競技性や遊戯性を単純に楽しもうとする考え方であり、一方のスポーツ手段論はスポーツをすることによって何かを得ようとする考え方である。現代社会においては、スポーツ手段論が支配的であり、教授が話してくれたようなドーピング問題などの批判も多くなっている現状がある。教授は、スポーツ目的論の立場を強調されていたのであるが、このことは剣道の指導的立場にいる私にとっては、ニュージーランドのスポーツの捉え方が腑に落ちると同時に、カルチャーショックとなった。剣道の理念は「剣の理法の修練」を手段とした「人間形成の道」であり、いわばスポーツ手段論に近い立場に捉えられるのではないだろうか。私自身は、大学などにおいてスポーツを指導する際、剣道の捉え方をスポーツに置き換えて考えることしかしていなかったのではないだろうか。この点については、今後の研究テーマとしていく計画であるが、少なくともスポーツ（および剣道）における教育効果にばかり目を向けていた私にとって、スポーツとは何かという、これまでの逆のベクトルで物事を考えるきっかけを得ることとなった。

◎　ニュージーランドでの剣道指導

クライストチャーチ市にある青稲剣友会（Canterbury Kendo Club）は、ベネット氏が20年前に立ち上げた剣道クラブであり、ニュージーランドで最も歴史のある道場の一つである。大きくシニア（一般）とキッズの２つのクラスで活動しており、シニアクラスは週３回（うち初心者クラスが１回）、キッズクラスは週２回行われていた。シニアクラスもキッズクラスも20名を超えるメンバーが揃い、シニアクラスは常時六段１名、五段１名、四段２名が指導・稽古にあたり、キッズクラスでは五段１名（日本生まれの女性）を中心に指導が行われていた（2016年4月からは、ユースクラスが追加された）。娘二人と共にニュージーランド剣道連盟に所属し、このクラブのメンバーに登録、稽古に参加させていただくと共に、渡航の１ヶ月後にはキッズクラスの指導を担当させていただくこととなった。

青稲剣友会のキッズクラスの子ども達には、３つのバックグラウンドがあった。もっとも多いのは父親がニュージーランド人、もしくは日本以外の国籍で母親が日本人の子ども、次に日本人の両親から生まれニュージーランドで育っている子どもであり、その多くがカンタベリー日本語補習校に通っていた。両親とも日本人以外の子どもは数名であった。道場の指導言語は日本語と英語の両方が使われていたが、数名を除きほとんどのメンバーは日本語ができることから、私の指導時には日本語を主に使用することを許してもらうことになった。このことは保護者からの要望でもあった。保護者が子どもに剣道をしてもらいたい理由の一つとして、日本の言葉と文化を学ばせたいということがあり、日本語の指導はむしろ歓迎であり、日本の道場のような「厳しい」指導も望んでいるとのことだった。その一方で、このことは日本生まれ以外の父親やニュージーランド生まれのメンバーの一部からは、理解しづらいという声もあるようだった。

帰国の最終期日まで、クラブで指導をさせていただいたが、指導の際には常に悩みを抱えていた。日本の子どもにとって、剣道は「稽古事」として保護者に通わされている場合が多いだろう。その狙いは、剣道の技術獲得はもちろんであるが、それを通じた日本人としての「躾」であったり、指導者の元で学ぶスタイルの「縦社会の経験」であったり、苦しい場面を耐え忍び、「我慢」を学ぶこともあるだろう。しかし、日本生まれ以外の父親やニュージーランド生まれのクラブメンバーにとっては、剣道はスターウォーズであり、サムライであり、戦いのゲームとして、剣道着と剣道具というコスプレを楽しむものとして捉えて門を叩いている。実際の指導場面では、日本人のハーフの子どもからも、先に述べたスポーツ目的論の立場からの遊戯性を求めている様子が伝わってくるのである。

もう一つ、剣道を指導する機会をいただいた。サマーホリデーの期間にスポーツなどを活用しながら日本語を学ぶというホリデープログラムを企画運営されている日本人の方から依頼を受け、そのプログラムの手伝いをすることになった。そこで剣道を体験するというプログラムを提案したところ快諾していただき、１日を使って剣道を使ったプログラムを担当することになった。プログラムへの参加者は、ほぼ全員母親が日本人のハーフで、６歳～14歳で10数名。竹刀を振らせるにはまだ危険であるということから、ホームセンターで発泡樹脂の棒を入手してそれを竹刀に見立て、一連の所作事や礼法を指導した上で、チャンバラをしてもらうという指導案を作成した。指導目標としては、単なる叩きあい（斬り合い）ではなく、相手との命のやり取りの模倣から相手に対する敬意や感謝を学ぶことを掲げ、プログラムを実践した。

棒を持った参加者が興奮しながら叩きあいを始めることは想定しており、それを制して剣道のコンセプトの解説をはじめた。ところが、なかなか日本の子どものようには理解が進んでいかない。特に命のやり取りや用具（刀と見立てた棒）の解説は、全くと言っていいほど関心を示さない。一部、言葉や表現の問題はあるだろうが、この差は何だろうか。

プログラム自体は成功裏に終わり、参加者からも好評の声を聞くことができた。しかし、短時間という時間的な制約があるとはいえ、目標を達成するに至らなかった理由を考える時間を持った。頭を下げる礼法、物には神が宿るという八百万の神の思想、命を取られたものは仏になるなどの考え方。そういえば、ニュージーランド生まれの子どもは、これらの日本の文化について、ほとんど触れる機会がなかったのではなかろうか。日本の子どもは、小さな頃から神社にお参りに行き、寺で仏様を拝み、おみくじに神の存在を想像してきた。ものを粗末に扱えばバチがあたると言われ、悪いことをすれば地獄に落ちると躾けられた。日本で剣道を始める子どもたちは、日本の文化（宗教観）ですでに育てられており、それが剣道の指導を受ける際に生きているのではなかろうか。ニュージーランド生まれの子どもはその文化の中におらず、剣道のコンセプトを理解する前の剣道を理解する上での素養を得ていないのではないだろうか。

ニュージーランドでの経験において、日本以外で剣道を指導する場合に知っておかなければならないことがあったと、帰国後に猛省した。その１つは、他国の文化を知ることである。ニュージーランドにおいては、スポーツを遊びや楽しみとして捉える「スポーツ目的論」の立場が強く、多様なスポーツを経験しながらそれぞれのスポーツの持つ遊戯性を楽しんでいる様子が窺えた。このことは、日本が学校教育にスポーツを取り入れ、スポーツにより何を学ぶのかという「スポーツ手段論」の立場が強いことと相反している。スポーツによって得られる結果は同じであっても、そのプロセスの違いは、時に指導者とスポーツ参加者や保護者との軋轢につながることもあり得る。剣道という宗教的要素を多く含んだコンテンツを海外で行う場合は、相手側の文化を学び注意して指導を行う必要があるのではないだろうか。

もう１つは、日本の文化および剣道の文化的特性を知ることである。日本国内で剣道を指導する場合、学習者はすでに剣道を理解できるだけの素養を持って道場に臨んできているだろう。素養を持たない海外の学習者に対して、いかに剣道のコンセプトを伝えるのか。そのためには、具体的に伝えることができる十分な知識と情報を持つことが必要になるのではなかろうか。

3月末、クライストチャーチ空港を剣道クラブのメンバーに見送られて帰路に着いた。家族一同を快く向かい入れてくれた青稲剣友会、英語表現が拙い私を預かってくれたカンタベリー大学、ニュージーランド剣道連盟の皆々様に心より感謝を申し上げたい。

早朝の日本到着後、その足で大学に向かい、早速３つの会議に参加することとなった。半ば強制的に仕事に復帰することになり、そこからあっという間の半年が過ぎ去ろうとしているが、仕事の合間合間にニュージーランドの体験がフラッシュバックしてくることがある。

１年間のニュージーランドの滞在によるカルチャーショックは、まだ身体に強く残っているようである。

＜参考＞

１）Sport and Active Recreation; Active New Zealand Survey http://www.sportnz.org.nz/assets/Uploads/attachments/managing-sport/research/Sport-and-Active-Recreation-in-the-lives-of-New-Zealand-Adults.pdf（参照日2015年9月5日）

２）ニュージーランド教育省ウェブサイト http://www.education.govt.nz/（参照日2015年4月23日）

３）ニュージーランドカリキュラムオンライン http://nzcurriculum.tki.org.nz/（参照日2015年6月10日）

４）Ian Culpan, Hugh Galvan (2013) Physical Education in New Zealand:a Socio-Critical and Bi-Cultural Positioning. Journal of Physical Education & Health, 2012, vol. 1 (1), 31-42

５）田原淳子ら（2007）ニュージーランドにおける学校保健教育―日本におけるオリンピック教育推進の手がかりを求めて–．体育研究所プロジェクト研究報告書．THE ANNUAL REPORTS OF HEALTH, PHYSICAL EDUCATION AND SPORT SCIENCE. VOL.26, 43-48

６）Durie, Mason (1994). Whaiora; Maori Health Development. Oxford University Press. p. 90.

７）ニュージーランド教育省 physical Education Online http://health.tki.org.nz

８）西尾建（2013）ニュージーランドにおけるジュニア世代の“補欠をつくらない”スポーツシステムの紹介と提言．笹川スポーツ財団ウェブサイトhttp://www.ssf.or.jp/topics/system/01.html（参照日2015年6月10日

９）馬淵領吾（2009）ホリデープログラムによる子育て支援．労働調査2009年3月号 1-2

１０）中西純司（2012年）「文化としてのスポーツ」の価値．人間福祉学研究第5巻第1号．7-24

本稿は、平成 27 年度専修大学長期在外研究員制度の研究成果の一部である。

平成２７年度　剣道専門分科会　事業報告

１）総会の開催

平成 27 年 9 月 10 日（木)、日本体育大学世田谷キャンパス教育研究棟 2 階 2201 教室において、平成 26 年度事業報告および平成 26 年度決算、平成 27 年度事業計画および平成 27 年度予算を審議し、承認した。

２）日本武道学会第 48 回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で講演会を開催した。

日　時：　平成 27 年 9 月 10 日（木）14：00～15：30
場　所：　日本体育大学世田谷キャンパス教育研究棟 2 階 2201 教室
テーマ：　「剣道とマスメディア　ーテレビ放送からみた剣道ー」
講　師：　太田雅英氏（NHK 大阪放送局　アナウンサー）
司　会：　長尾　進（明治大学)、大石純子（筑波大学）

３）研究会の開催

下記の内容で研究会を開催した。

日　時：　平成 28 年 3 月 12 日（土）15：00～17：00
場　所：　講道館 2 階　第 4 会議室
演　題：　「民間活字メディアからみた剣道」
パネラー：小林伸郎氏（剣道時代）　安藤雄一郎氏（剣道日本）
司　会：　アレキサンダー・ベネット（Kendo World 主筆）

４）第 16 回世界剣道選手権大会における剣道専門分科会企画の開催

第 16 回世界剣道選手権大会に際し、剣道専門分科会企画を開催した。

日　時：平成 27 年 5 月 27 日（水）　10:00～12:00
場　所：国立オリンピック記念青少年総合センター
テーマ：「剣道具を通して日本文化を知る」
第 1 部　DVD「剣道具にみる職人の技と心」上映（１時間）
第 2 部　ワークショップ　「本物の剣道具を感じてみよう」(1 時間)
講　師：鉄川榮市氏（東京正武堂・剣道具師）
アシスタント：井上大久氏・齋藤一貴氏（同上）

５）幹事会の開催（３回）

下記の日時・場所で、幹事会を３回開催した。

平成 27 年　6 月 6 日（講道館）
7 月 25 日（講道館）
10 月 31 日（講道館）

※　原則として、年 4 回全国理事会時にあわせて開催しているが、28 年 3 月 12 日理事会の折は研究会開催のため、分科会幹事会は見合わせた。

６）会報『ESPRIT 2015』の発行

会報『ESPRIT 2015』を、平成 27 年 10 月 31 日付で発行した。

７）ホームページ「KENDO　ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO　ARCHIVES」(http://www.budo.ac/kendo/) を運営した。

８）会費の徴収

平成 27 年度会費 2,000 円を徴収した。

９）会員数

平成 28 年 3 月 31 日現在で、会員数は 123 名　（うち名誉会員８名）となった。

以上

平成27年度 剣道専門分科会 一般会計決算書　（平成27年4月1日～平成28年3月31日）

1.収入の部

科　目	予算額	決算額	差異	摘　要
1 前年度繰越金	117,587	117,587	0	平成26年度からの繰越金
2 会員会費	220,000	286,000	△ 66,000	会費2,000円×143口（27年度分84口、過年度分他59口）
3 本部助成金	50,000	80,000	△ 30,000	学会本部より助成金（分科会への定額補助50,000円＋テープ起こし代30,000円）
4 広告収入	48,000	47,460	540	ホームページ、バナー広告 2,000円／月（26・27年度分）
5 寄付金収入	0		0	
6 特別会計より組み入れ	0		0	
7 利息	0	85	△ 85	分科会口座預金利息（4月1日：28円、10月1日：57円）
8その他	0		0	
当期収入合計	435,587	531,132	△ 95,545	

（単位/円）

2.支出の部

科　目	予算額	決算額	差異	摘　要
1 研究助成費	150,000	87,000	63,000	講師お車代：48回大会分科会企画（30,000円）、研究会（27,000円）、テープおこし(30,000円）
2 広報活動費	10,000	0	10,000	
3 印刷・消耗品費	80,000	52,445	27,555	ESPRIT2015印刷代 ・事務用品等
4 通信費	40,000	16,162	23,838	郵送代、切手・はがき代
5 会議費	20,000	5,000	15,000	研究会時研究打合わせ補助
6 交通費	80,000	11,000	69,000	幹事会等交通費
7 傭人費	50,000	0	50,000	
8 予備費	5,587	858	4,729	郵便振替残高証明発行料、振込手数料
9 次年度繰越金	0	358,667	△ 358,667	平成28年度への繰越金
当期支出合計	435,587	531,132	△ 95,545	

（単位/円）

監査の結果、適正であることを証明いたします。

平成28年 7月2日

日本武道学会剣道専門分科会監事

八木沢 誠 印

軽米 克尊 印

平成27年度　　特別会計決算

1.収入の部

科　目	予算額	決算	摘　要
1）前年度繰越金	400,240	400,240	
2）利息	0	0	
当期収入合計	**400,240**	**400,240**	（単位／円）

2.支出の部

科　目	予算額	決算	摘　要
1）一般会計へ繰入	0	0	
2）研究助成費	300,000	28,309	16WKC企画への補助
3）広報活動費	100,000	0	
4））予備費	240	0	
当期支出合計	**400,240**	**28,309**	（単位／円）

当期　差し引き残高（繰越金）　**371,931**

平成27年度　　16WKC 関連企画会計決算

1.収入の部

科　目	決算	摘　要
1）全日本剣道連盟からの助成金	50,000	
2）分科会特別会計からの補助金 3）寄付金	28,309 18,000	
当期収入合計	**96,309**	（単位／円）

2.支出の部

科　目	決算	摘　要
1）交通費	20,000	臨時幹事会、シンポジウム
2）傭人費	50,000	講師謝金（40,000円）、アルバイト代（10,000円）
3）通信費	8,616	ハガキ代、宅急便代
4）印刷・消耗品費	17,693	ポスター印刷、文具
当期支出合計	**96,309**	（単位／円）

差し引き残高　**0**

平成２８年度事業計画

１）総会の開催

下記の日時・場所において総会を開催する。

日　時：　平成 28 年 9 月 8 日（木）
場　所：　皇學館大学　7 号館 2 階 721 教室
議　題：　平成 27 年度事業報告および平成 27 年度決算、
　　平成 28 年度事業計画および平成 28 年度予算ほか

２）日本武道学会第 49 回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で、講演会を開催する。

日　時：　平成 28 年 9 月 8 日（木）14：00（分科会総会終了後）
場　所：　皇學館大学　7 号館 2 階 721 教室
テーマ：　武道の伝統性について考える
講　師：　湯浅　晃　先生（天理大学）
司　会：　大保木輝雄（分科会会長）、酒井利信（筑波大学）

３）研究会の開催

平成 29 年 1～3 月の間に開催する。

４）幹事会の開催

原則として、本部理事会開催日に幹事会を行う。
（5 月、7 月、11 月、3 月）

５）広報活動の活性化

・剣道に関する学術情報の英訳をし、発信する。
・他学会及び海外研究機関との交流を活性化する。

６）会報『ESPRIT 2016』の発行

会報『ESPRIT 2016』を発行する（9 月発行予定）。

７）ホームページ「KENDO　ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO　ARCHIVES」（http://www.budo.ac/kendo/）を運営する。

８）会費の徴収

平成 28 年度会費 2,000 円を徴収する。

以上

平成28年度 剣道専門分科会 一般会計予算書　　（平成28年4月1日～平成29年3月31日）

1.収入の部

科　目	予算額	前年度予算額	差異	摘　要
1. 前年度繰越金	358,667	117,587	241,080	平成27年度からの繰越金
2. 特別会計より組入	0	0	0	
3. 会員会費	220,000	220,000	0	2,000円×110口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	24,000	48,000	△24000	ホームページ、バナー広告 2,000円／月 28年度分
当期収入合計	652,667	435,587	217,080	

（単位/円）

2.支出の部

科　目	予算額	前年度予算額	差異	摘　要
1. 研究助成費	150,000	150,000	0	第49回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	10,000	10,000	0	恒常的広報活動への助成
3. 印刷・消耗品費	80,000	80,000	0	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	40,000	0	郵送代、切手・はがき代等
5. 会議費	20,000	20,000	0	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	80,000	0	幹事会等交通費
7. 傭人費	50,000	50,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	222,667	5,587	217,080	
当期支出合計	652,667	435,587	217,080	

（単位/円）

平成28年度　　特別会計予算書

1.収入の部

科　目	予算額		摘　要
1)前年度繰越金	371,931		
2)印税収入	－		
当期収入合計	**371,931**	（単位／円）	

2.支出の部

科　目	予算額		摘　要
1)一般会計へ繰入	0		
2)研究助成費	270,000		国際学術交流の推進（講師交通費、謝金等）
3)広報活動費	100,000		剣道に関する学術情報の英訳
4)予備費	1,931		
当期支出合計	**371,931**	（単位／円）	

事務局だより

大保木会長の巻頭言にありますように、杉江正敏先生が志半ばにしてご逝去されましたことは、我々後進にとりましてまさしく痛恨の極みであります。個人的にも、温かく、時に厳しく、長年にわたりご指導をいただきました。

大保木先生が紹介されていますが、杉江先生がこれまでにESPRITに記されました「武道学、特に剣道の科学は、方法は多様であろうかと存じますが、実践にねざしたものでありたいと願っております。これは近世中期以降の知行合一や事理一致の思想を背景として成立してきた剣道の宿命であり、保持すべき伝統性でもあろうかと考えます」、あるいは「『継承なき創造は稚拙の域を出ない』そして『創造なき継承は形骸化の域を出ない』の言葉を噛みしめながら、分科会会員各位の研究の成果が結集され、剣道で逃してはならない『継承』すべきものは何か、を検証しながら、大胆な『創造』がなされることを祈念して御挨拶といたします」等の言説を再度拝読し、問題の所在を明確化する感性の鋭さと、それを文章として表現する洗練された筆力に改めて驚かされましたと同時に、本分科会の目指すべき方向性を再確認した次第です。

分科会会員の皆様が、実技実践と学問の橋渡しをしつつ杉江先生の思いを実現する活動が出来ます様、事務局としてお手伝いさせていただければと存じます。

また、本会報は専門分科会の事業報告にとどまらず、ここでしか得られない情報を発信していきたいと考えております。斬新な企画のアイディア等ございましたらご連絡ください。

事務局長
酒井　利信（筑波大学）

剣道専門分科会会報 編集委員

大保木　輝雄
長尾　　進
数馬　　広二
酒井　　利信
齋藤　　実（デザイン）
軽米　　克尊

日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒305-8574　茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学体育系　酒井利信研究室気付

E-Mail: sakai@taiiku.tsukuba.ac.jp